

喜十郎先生インタビュー

続 渡部喜十郎先生おおいに語る

法曹界の最長老であり東京法曹会原始会員の渡部喜十郎先生から、貴重なお話を伺う機会に恵まれました。

3時間に及ぶインタビューのうち、弁護士としての心構え等について伺った部分は東京法曹会ニュースに既に掲載致しましたが、今回は先生の苦学時代のお話、震災、徴兵の頃、そして先生の処世訓等についてご紹介します。

(平成11年2月18日渡部先生の事務所において)

インタビューに当たって渡部先生の作られた自筆メモ：

「苦労は宝 健康 信念 汗と涙の財産 災難と勇氣 倍働倍収」

車を曳いていた頃のこと

私は小学校5年間は自転車で、それがとてもつらかったけれども、現在も、自転車でも何でも乗れるんだから。それから、田舎道ですから、日曜日は、山へ松茸狩りに行くんだけれども、それも1人でいかなきゃ、皆が早く行って採るから。だから、私はいつも一人だったんですよ、中学校のときには。ほかの団体競技ができないんですよ。居残って練習をしなくちゃいけないから。

東京に来てから、世話してくれる人がない。酒屋の小僧に入って、宿賃なんかないもの、それでも、泊めるだけは泊めてもらって、食わしてくれる。たまたま近所におったおじさんが納豆売りだったんですよ。浅草橋から雷門の途中のところにあつたんで、納豆を売って、小遣いを稼いだ。朝の4時に起きて、それで納豆屋をやって。それから、いろいろなことをやったよ。奇抜なことも、人力車もやったね。人力車を置いたところは医者家で、間代は要らないですよ。食べさせてくれる。電柱に爺や募集と書いてあつたから、これで朝早く起きて、納豆を売らなくてもいいし、泊めてもらったら、間代も要らないと思って行ったんだけれども、初め、断られたんです、お医者さんの家は。泊めてくれて、食べるものと、風呂に入れてくれる。けれども、爺やだから、仕事は何をするかと言ったら、朝起きたら、表の掃除、水をまいて、裏の水をまいて掃除をして、坊ちゃんが1人に、お嬢さんが4人いたから、その靴磨きをして、小学校へ行かせなくちゃいけない。先生の靴は磨かなくちゃいけない。人力車は毎日きれいに掃除しなくちゃいけない。お風呂を沸かしたら、ガスで沸かすのだけれど、先生が入って、奥さんが入って、坊ちゃん、嬢ちゃんが入って、その次には4人いて、その次に、女中が2人入って、爺やが後から入って、風呂を掃除して。

爺やというのは、一番卑しい。だから、学生の勤め口はないと言って。あなたは将来、弁護士を夢見て、大学に行くようになったら、そんな人が、毎朝6時半くらいになったら、爺や、爺やと皆

が呼ぶんだから、こんなことできるわけないからと言うんだけど、いや、先生、体格検査をした上で採用すると書いてあるから、それで私は頑張っている。先生は診察しています。病院ではなくて、小さな医院だから。先生1人だから、どうしても雇ってもらいたいから頑張っていたら、先生も困っちゃって、奥さん呼んでこいという。奥さん、先生が呼びですよ。奥さんは2階で裁縫をしていて、何でしょうか。ここにいる渡部というんだけど、うちの電柱の広告を見てきて、爺やになりたいから雇ってくれと言うんだけど、聞いたら、夜は法律学校へ行って、昼間は爺やをやると言うんだ。そんな人が 爺やなんかできないだろうと思って断るんだけど、というと奥さんも、駄目ですよ、学生なんかがする仕事じゃないんですからね。あなたが10日か20日勤めて、嫌になったと言ってやめると、また小林医院は爺やが変わった、あれは待遇が悪いから変わったんだろうと、うちの評判が落ちるから駄目ですよ。だから、もう取りつく島もないけど、私もじっとおったら、先生の診察を邪魔になるから、失礼致しましたと帰る。ちょっと待て、と先生が言うから、何でしょうか、先生。ちょっと花ちゃん呼んでくれ、女中を呼んでくれと言うんです。女中が、何でしょうか。この書生さんに、お昼のご飯をあげて。どうぞこっちに来てくださいと、食堂に連れて行かれて、井にご飯を入れて、おかずは一品だったけれども、それを食べて、私は帰った。あしたから雇う人なら、ご飯も出すでしょうね。断ったんですよ。断ったら、その家に私は行かないですよ。そんな人にご飯をやるという、先生の親切に惚れたんですよ。

「人を見たら泥棒と思え」と、東京へ来るときに、田舎のおっかあが言ったけれども、どっちを見ても知らない人ばかりで、東京にも、訪問して断られた人に、昼飯を食べて帰れ、というような親切な人がいる。東京にもこんな親切な人がいるかと思うと寝られない。明るる日、もう一遍行って、先生、私は何でも辛抱しますから、雇ってください、粘って雇ってもらったんですよ。それで、先生のところでは金はくれない、泊めてくれるのと、風呂へ入れてくれるのと、寝かしてくれる。間代も要らない。金は患者さんの家へ行ったら、車曳いて相当な金になるんですよ、流行性感冒がはやったりすると、方々へ行きますから。ここへ行って20銭で、それが貯まったら、1年間で試験を通過してやろうと思っていたんですよ。そういうふうにしてやっておったと。

ところが、日曜日に先生が三越に行くと、三越は金をくれないんです。そのときは先生が、済まんけど、渡部君、今度の日曜日は三越だ。三越は自動車入れがどこにもなかったから、裏の方から並ぶんですよ。裏では全部車が待っているんです。人力車が100台くらい並んでるんです。それで先生が裏から上がっていく。上がっていったら、皆スリッパに替えるんです。靴じゃなかったんです。靴は先生の帰る迄に持って帰って暖めておくんです。先生、きょうのご予定は。そうだね。1時間くらいだね。かしこまりました。それで私は車のところへ帰ってきて、自分の人力車の足を載せるところに座って、先生の靴をひざの上に抱えて暖めている。もう時間が来たと思うと、先生が出て来るところへ、さっと思いきまして、先生が2階からおりてくると、へいっ、とその白い靴を先生が履いて帰ってくる。ところが、あるときに、学生が2人おりてきたんです。買い物をして。それを遠目に見たら、私の田舎の中学校の、私より1級年下の白方という男なんです。それで私は懐かしいから、「びっくりしたな、白方君」と声を掛けたんです。白方は後ろを向いたけれど、人力車の中でとめられるわけがないから、自分じゃないと思って行っちゃうんです。私は走っていつ

て、白方君、中学の一級上の渡部喜十郎だよ。おまえ、何をしてる。人力車をしてる。呆れ返ってものも言わないで行っちゃったです。しまった、と思ったけれど、もう遅いや。それで彼が帰って学校で、「先輩の渡部さんが東京で人力車をしている」とを言いふらしたんですよ。それで、新聞の編集長の息子が来て、人力車までして苦学している渡部喜十郎が新聞に出たんですよ。田舎の方では、今でもそうだけれど、昔は新聞は学校か役場しかなかったんです。役場の助役がその新聞を見たら、渡部喜十郎さんが車曳きをしてるとわかったものだから、びっくりして、私の姉のところへ使いをよこして、喜十郎さんが人力車と新聞に出ていると。姉もびっくりしたんですよ。「あなた、知っているの」「いや、知りません」「問い合わせてみたらどうですか、喜十郎さんに。おっかさんにも見せてあげなさい」と新聞を貸してくれたんだね。「あげるから、お母さんに見せなさい」それで、「ありがとう」と言って帰って、お母さんに見せて、お母さんは字が読めないから、読んでやると、お母さんが泣いてね、なるほど、行くときには長男が反対しているでしょ。東京へ行っても駄目だ、田舎のぼろい中学校を出たぐらいじゃと。「田舎へ帰れば人力車をしなくても、食えるんじゃないか、喜十郎を呼び戻せ」とお母さんが泣いてばかりいて寝ないから、帰ってこいと言って、姉さんが、手紙をよこしたけれども、私は帰らない、帰ってもすることがない。それで、姉さんが、お母さんの顔を見たいだろうから、まだお母さんが死ぬ前だったんで、お母さんを町に連れて行って写真を撮って、その写真の中に新聞の私の記事だけを切り抜いて入れてくれたんです。私はそれを読んだけれども、帰れっこないですよ。この新聞の切り抜きが私を震災のときに助けてくれたんです。

震災の騒動をこれで切り抜けた

震災のときに、***やアカや不穏分子が焼け残ったところに爆弾を投げて、東京を本当に焼け野原にしてしまうというデマが流れた。それで、井戸水を飲んではいけない、水道がないからといって井戸水を飲んだら、毒を入れられていてみんな殺されちゃうから、自警団を組織して叩けというお触れが出ていたんです。それを私は知らないものだから、明るる日に上野に行った。なぜ行ったかという、お母さんのくれた布団だからと思って、本と布団を積んで、近くの大工さんの車を手伝ってやって、車を借りて、積めるだけ積んで、上野の西郷さんの銅像のところまで上げたんですよ。それさえ焼けていなかったら、寝るにも布団があったら寝られるし、本があったら学校へも行けるかと思ったんだけど、そうしたら、上野の山にはいっぱい人がいて、皆そこへ避難したんですね。私もそうだったんです。アパートの方は焼け出されて、ずっと上野の駅の方へ焼けていくんです。そうすると、旋風が渦を巻いてくるんです。それが上野の山に吹いてきたら、息ができなくて死んでしまうよ。それでワァーッと上野の山の人もみんな荷物をほったらかして逃げたんですよ。それで私は逃げて大きな金持ちの家の門の外の道路のところで寝て、明るる朝起きたら11時。焼けていなかったら、本も布団もとられるから、早く見に行かなくちゃいけないと思ったんだけど、もうくたびれていて、見たら、火がこんなになっていて、これは大変だと思って、上野へ行ったけれども、喉が渴いてしかたがないので、それで昨日から食べていないから、お寺に行って坊さんに言ったら、お寺には必ず井戸があるに違いないから、水を一杯飲ませてもらえると思った。

上野の寛永寺は焼けなかったけど、裏の門がもう倒れてしまっていたから、裏からでも表からでも入れるんです。それで、「ごめんください」と言ったら、「何ですか」と坊さんが出てきた。「すまないけれど、水を飲ませてください」「いや、駄目です、水道が出ない」「井戸があるでしょう、一杯だけ飲ませてください」人相が悪い上に、暑いから着ている物もよれよれだし、火の中を逃げたし、汗をかいているから、顔なんかはもう頭も汚れ放題で、これを見ては、苦学生だと言っても何を言っても通らない状態だった。それを見て、避難民が、怪しい奴が来た、来たと言うんですよ。それで、私はワーッと取り巻かれたんです。皆で槍を持ったりして、「おまえらのために日本はこれだけ死んだんだから、命は貰った、覚悟しろ」と言うんです。「何ですか、私は学生です」「学生もくそも関係ない」と言うんですよ。私は顔色が変わって、地べたについて、ワーッと大きな声で泣いたんです。「親からもらった大事な体を調べてから殺せ！」私は泣いたんです。50~60人が集まったです。そこへ警戒の憲兵がやってきて、「憲兵さん、助けてください、私は疑われているんです。助けてください」。憲兵も視察に来たんだから、私をどうすることもできないですよ。

それで監獄に連れていったんです。監獄といっても、林間監獄、桜の木から方々に綱をひいて、そこが臨時の監獄になっている。そこへ憲兵が連れていったんですよ。それで、「お巡りさん、これ、何時になったら調べてくれるんですか」とてもじゃないが、調べがつかない。そうこうしていると、ワッシュヨイ、ワッシュヨイと私と同じように、首に縄をつけて引きずって来たりするんです。そこがいっぱいになると、今度は私らはトラックで美術館に運ばれて、美術館でもまた手をつながれたまま、一晩やられるところだったんです。夜7時ころにお巡りさんが、電気はないのだから提灯をつけてわざわざ入って行ったから、私が、「調べてくれるんですかね」と言ったら、「いや、あれは警戒のお巡りさんが夕飯を食べに来たんだから、夕飯を食べたら、また出ていってしまう」と言ったんです。それで、私はこれは大変だと思って、ふと気がついたのは、荷物を上野の西郷さんの銅像に置くときに、バスケットの中に入れていたお母さんの写真だけは焼いてはいけないと思って、小さい風呂敷に包んで、ここへ用心につけておいたんですよ。このお母さんの写真を証拠にして調べてもらって、それでアカでも***でもないから出してもらいたいと思って、自分だけが白だと言っても、調べるのは向こうが調べるんだから。それで私は、美術館の柱が、みんな鉄橋の下の柱みたいに、けり上がれるようにこんなになっているんですよ。そこへそっと寄って行って、角のところで、お巡りさんがこちらを向いていると、向こうを見ていて、縄を切っちゃったんです。切っちゃったけれど、こういう風にしていたんです。そうしたらぼつぼつお巡りさんが出ていくんです。出たらあしたの朝までもう帰らないから、それで私が奥の方へとんでいったら、逃走、と言って、その辺に警戒していたお巡りさんがやってきました。食事は済んで、お茶を飲んで休んでいるところへ行ったんです。「何をするか」「私は何も知らないで疑われてきたんです。ここに証拠があるから、これを見てください。証拠を見た上で2日でも3日でもおるから」と言ったら、「あるというのなら、見てやれよ」と上の人が出てきて、それでお巡りさんが「出せ」と言うから「母の写真ですから開けてください」開けたら、写真が落ちた。町で撮ったもの。「これは何だ」「それは私の車夫の姿でございます」「この切り抜きは何だ」「私です」「読んでみろ」と上の人が出て、大きな声を出して読んだんですよ、それでもう皆がびっくりしたんです。あなたのよう

な善良な青年を今まで苦しめたということは、誠に申し訳なかった、避難民に囲まれたことは勘弁してくれ、早速出て行ってよろしい、と言われて、命拾いをしたんです。

宴会芸もお手のもの

そんな形で帰って、それから、兵隊に出たら広島でしょ。で、兵隊は23歳の暮れで、24歳になってまた、こちらに来たんです。それが今度は、40歳のときに、酒を飲んだり何かして患ったんです。それはどうしてかという、宴会でも1次会でも2次会でも出ていたんですよ。だから、あなたたちと時代が違うから、昔の人だったら、渡部というのは、もとは何をしていたんだというくらい、端唄から小唄から、浪花節から浄瑠璃から、詩吟から、詩吟も段をとってるんですよ。小学校1年の歌からみな覚えています。踊りもダンスもできる。ダンスは、講堂で先生を呼んできて、私が主任でやるようなほど。それから、私は日本舞踊もできる。だから、弁護士会の宴会でやるし、また、小池金一らが安木節を唄うと、私が踊るんです。女の着物を着て。

それがもとになって、酒を飲むと、潰瘍が出て、切らなきゃならないような形になったんです。そのときに私は初めて、健康ということに気がついた。それまでは、私は無鉄砲に健康ということをおぼえて、まだ病気で寝たことがないんだから。人生計画を立てなくちゃいけないなど。東京には賢い人がおるが、何人計画を立てているか、聞いてごらんなさいよ。私は、一生のうち、いつまで働いて、いつから先は収入がなくなっても、食べるようにしなければならぬと思って、働くの50年と決めたんです。何でそう決めたかという、縄文時代は人生の平均年齢は30年だった。それが、戦国時代の織田信長は「人生わずか50年」と言っているんです。あの時分は50年だったんだからね。今は人生80年というのが、平成10年の男女の平均寿命が80歳だから。ところが、私が、「人生わずか50年」という織田信長を調べてみたら、49歳で死んでおるんですよ。あれだけの武将が。私は50歳で死ぬとは思わなかったです。自分は元気だったから。50歳で人生の勝負は決まると思ったんですよ。50歳になって、家がないとか、土地がないとか、小遣いがないとか、そういう不景気なことじゃいけない。50歳になったら、ぴたっと弁護士に停止命令がでて、1年中食べるだけの財政を確立しなくちゃいけないと思って、私は計画を立てたんです。

妻を書生代わりに

女房ももらったんですけれど、女房を書生がわりにもらったんですよ。自分が外を歩くときに、留守番がなかったら困る。それで女房にタイプライターを教えて、事務所の中でこれを打てと言っておいて、私は、こんにちは、と御用聞きをやったんです。しっかりタイプライターを習っておけば、私が家にいるときには、これを裁判所に出しておくと、書生がわりにしよったんだから。それで、私は、障子紙に「欲しがりません、50歳まで」と書いて、それを大黒柱に貼っていました。女房は何か欲しいとは言わない。それが標語だったんです。

裁判所に行くと、午前と午後とかかる。昼飯を食わなくちゃいけない。昔の古い弁護士会館、あれは私が開業してから3年目に建てたんです。私はあれを建てたときに、確か50銭を寄付しています。私はまだ新米だったから。昔のあの会館は建築費10万円だったんです。10万円も、と思ってびっくりしましたね。私は外では、食わないのですよ。これぐらいの大きな握り飯を、中に梅干しを2つ入れてこしらえてもらって、海苔で巻いておいて、それをかばんの中に入れておいて、それを持って行って、昼ごろになったら日比谷公園へ出るんです。日比谷公園の花畑、今はあるかないか知らないですけど、花畑のところにベンチがあるんです。花畑を子供が見にくると、食べ物があるから、鳩が集まってくるんです。その鳩を見ようとしてベンチに腰掛けていると、鳩が寄ってくるから、ご飯粒を2つ3つ放ってやる。鳩を見るような恰好をして握り飯を食べていました。今は猫も杓子もかばんを持っているけれども、昔はかばんなんか持っている人はいなかったですよ。私たち学校通いはみな風呂敷包みだったんだから。向こうからかばんを提げて来よったら、大抵弁護士です。向こうから年とったかばんを提げた人がくると、ああ、弁護士だな、と思うて、その人が前を通る時には、鳩を見るような恰好をして、その人が通ってしまったら、またこうやって食べる。それから、電車の入ってきたところに、日比谷公園の事務所があったんですよ。事務所の前に1カ所だけ水道があるんですが、ねじがないんですよ。水がトロトロ出よるんです。そこへ口を持って行って水をすすって飲んで、お昼を済ませて、それで仕事をするんですよ。

そこまでしてやりおったら、大東亜戦争の招集が来た。戦争の末期です。ガダルカナルが陥落する前、ガダルカナルの要員として、騎兵隊は動員で、私は、兵隊300人と将校が5人と、軍医が7人、それが招集を受けた。そのときに私は、ああ、もう戦争は負けだ、日本の飛行機はもうなくなったとか、言いよる最中に、動員が来るぐらいだったら、私は生きて帰れないと、覚悟したんです。それが41歳のときだから。40歳のときに、東京弁護士会の副会長をやったんですよ。それで私がやめて、明くる年は、佐久間さんが会長になったんです。佐久間さんは、元代議士をやっていてやめて、弁護士で代議士をやって、またやめて、また弁護士をして、2度目の会長をやったんです。可愛がってくれたんですよ。その時分に私はすでに丸の内に出ていたからね。

開業13年目に

そのとき私が勘定してみたら、開業して13年目、私の弁護士生活も13年かと思うたです。残念だな、と思ったけど、兄弟が言うには、おまえは神に何度願をかけた、どうか試験を通ってください、免状を両親の墓前に供えたら、明くる日に死んでもいいから、免状だけ下さいと、前にかけたじゃないか、13年も弁護士したことを有り難いと思えと言う。それで、佐久間会長以下、新しい理事者が、あれが一番若くして丸の内に出たと。

丸の内は会長級の人でないと事務所を出せないんだよ、小さいところだったけれど、とにかく丸の内に出た。事務長も、ガダルカナルへ行くことになっていたのに、ガダルカナルが陥落してしまったんですよ。戦艦大和がシナ海の沖へ撃沈されてしまって、日本には飛行機が1機もなくなっ

やったんです。それと同時に、ソ連が日ソ同盟を破約して攻め込んできた。だから、私たちの連隊は満州へ、蘇満国境へ行けという動員が来たんです。でも、私たちの連隊はガダルカナルの要員だから、夏用服を着よった。蘇満国境というのは寒いでしょ。それで冬服にかえて、それから、蘇満国境は腸チフスがはやるからといって、腸チフスや赤痢の予防注射をぽんぽん打つんですよ。腕がこんなに腫れちゃって。

そうこうしているうちに、ガダルカナルが陥落して全滅してしまった、日本には飛行機が1機もなくなると、東京の参謀本部からお達しが来て、飛行機がなくなったから、アメリカが日本の本土へ敵前上陸すると。どこへするかと言ったら、高知県にするらしいというんです。だから、四国の兵隊は全部高知県の方に回って、山に濠を掘って、海の方へ大砲を向けて、敵前上陸をさせないようにしろと。四国へは、援軍が本州からは渡れないという。瀬戸内海を船で積んでいって、飛行機が何かでやられたら困るから、本州からの援軍はないとして、四国は四国の兵隊と、四国の住民で死守しろと来たんですよ。そのときに、秋庭大佐がそれを報告に四国へ来たんです。

演説が進路を変え、生きながらえた

そのときに、私が偶然なことに、秋庭大佐の前で演説したんです。他の者がお話をするより、一番上手に話せると思うからという連隊長の命令で、「戦争は苛烈だ、今ここで国民が一億一心になって、日本の国を守らなかったら、今生きている国民の恥だ」というような演説を私がしたんです。

その演説が、参謀本部から懸賞金を受けた。陸軍大学の秋庭大佐が見て、びっくりしたんです。それで私の連隊長に、あれはどういうような人物ですか、と聞いたというんです。「あれは、弁護士で、東京弁護士会の副会長をしたんだけど、ガダルカナルの要員で動員を受けてきたんですよ、ところが、ガダルカナルが落ちたから、今度は、間もなく蘇満国境へ出発します」と言ったんです。その場はそれで終わったんです。その後、秋庭大佐は警衛隊、歩兵隊、輜重兵隊を廻って、師団司令部へ行ったんです。それで師団長にお別れして、東京へ帰ることになった。そのときにお茶を飲みながら師団長に話したんですよ。「師団長、騎兵隊には変わった男が1人おりますよ」「どんなんですか」「この間、私が騎兵隊へ行って、昼飯をして輜重兵隊へ回っていったら、騎兵隊でこんなやつが演説して、私はほろりとした。連隊長に聞いたら、弁護士で、招集を受けてガダルカナルの要員で来ていて、ガダルカナルが落ちたから、蘇満国境へ行くそうだけれど、あんなのに鉄砲を担がせてもしょうがないですよ、あれは師団司令部の報道部へ入れて、方々の四国四県の士気高揚のために、演説させて回ったと思います」と師団長に話したんです。それでも東京に帰ってしまったですよ。後で師団長が私の連隊に私を見に来たんですよ。それで連隊長とも話して、私に師団へ来ないかということになったんです。蘇満やガダルカナルへ行ったら大変ですよ。私は嬉しくてもうたまらないけれども、ぜひ行かせてくださいと言えないんですよ。連隊長も私を可愛がってくれたから、「隊長殿のお考えはどうでしょうか」と聞いたんです。「あなたが行くのなら行ってもいいよ、それならそれで、はっきり師団長の前で、師団へ採ってくださいと、ぐずぐず言

わないではっきり言えよ」「連隊長、今まで可愛がっていただいたけれど、師団へやっていただきます」と言って、それで師団長のところへ行って、辞令をいただきますと言うて、渡部喜十郎は師団付になった。私が抜けて、ほかの人は皆、「勝ってくるぞと勇ましく」と蘇満国境に行ったんです。そうしたら、全滅じゃなかったけれど、渡部だけ生き残ったんです。

終戦を迎えて事務所再開 しかし・・・

東京を引き上げるときに、本郷の家は大家さんに返してしまって、3人の子供と女房を連れて、愛媛県の田舎へ帰って、田舎で私は60歳になったら、ここへ帰ってきて、この家で釣りをして、悠々閑々と老後を楽しむんだと、ぼろい別荘みたいなものを建てとったんです。そこに女房と子供を置いて、一番下の子供は、私が出た村の小学校に転校させて、上の子は、女学校と中学校は、松山の中学校へ転校させておいて、おまえたち、お父さんが帰ってくるまで、お母さんに親孝行して、一生懸命勉強するんだよ、喧嘩するんじゃないよ、と言って、私は別れるけれども、私はもう生きて帰れないと思ったんです。戦争が負けたら。

私が東京に来るときに、お母さんが手を持って泣いたけれども、あれが報いて今度は私が泣かされる時が来たと思ったな。それで生きて帰ってきたら、戦争に負けたから、今はもうないんだいけれども、女房が、ああ、よかった、子供が喜んだ、お父さん、もう間もなく1カ月もしたらお正月が来るから、今年の正月は親子そろって、楽しいお正月ができますよと。ちょっと待て、私に正月はないんだよ、私は田舎で百姓するんじゃないだろ、私は兵隊に行ったんだから、東京に家も事務所もない。だから私はこれから行って、東京で家を持たなきゃいけないし、店を持っておまえたちを呼ばなきゃいけないじゃないか、私の友だちだって、兵隊に行かないやつは、東京に残っていて家もまだあるかもしれない、行ってくるからと言って、女房も子供もがっかりしたけれども、私は昭和20年の暮れに、正月をよそに東京へ来たんですよ。それで落合に知り合いがあって、その知り合いのところへやって行って、下宿みたいにお金を払うから、しばらくあなたのところに置かせてくれませんかと言って、置かせてもらって、さあ、探したって、焼け野原で何もない。こんなビルディングも何にもないですよ。駅だけは、ここから物資や兵隊もみんな行きよったのだから。東京駅と新橋駅の間は連絡がなかったの。

そんなんですから、探してもない。そうこうしよったら、新橋駅の向こう側に駅の広場があったんですよ。その広場にブラックマーケットができたんです。それは、港区と銀座のテキ屋の親分が、昔は駅の前を使うのは平気だった。どこからか闇物資を取り寄せて、木造の大きな2階ビルを建てたんです。しかも建てたといっても、屋根は瓦がなくて、ルイシーギングという油紙で、こういうところもベニヤ板を張るだけで、にわかづくり。八百屋と果物屋と魚屋の市が立って、2階が貸し事務所になったんです。

そこを私が10坪を借りることになった。何でかといったら、私は出征するときに、出征したという挨拶を年賀状でお得意さんに出したんです。帰りましたからという通知は出せないですよ。印刷もないし、だいたい宛て名がもうない。東京はみな焼けてしまって、私の名簿も焼けてしまっていないんですよ。けれども、新橋の駅のプラットホームから、ここから見るよりももっと近くに、渡部法律事務所の看板を出せば、だれでも、あっ、渡部さんの看板、渡部さん、戦争が終わって帰ってきたなど、来てくれるでしょ。それでそこを借りることになって、15万円だと言うんですよ。15万円の金をこしらえるのは難儀でしたね。それで、そこを借りて、窓ガラスの「渡部喜十郎法律事務所」の広告代が月5,000円ですよ。それが名刺かわりになると思って看板をこしらえて、これでいいと思ってやったら、3カ月目にそれが焼けたんです。何で焼けたかという、下の乾物屋の小僧が石油コンロをひっくり返したんです。それが皆ベニヤ板で、ペンキを塗ってね、ペンキには揮発性の物質が混ざっている。わーっと広がって2階まできれいに真昼間に焼けちゃったの。それで私の15万もパイのパイのパイになったんですよ。わずか3,000円もうけただけ。3,000円の事件を1つ受けたただけでね。

思い出ばなしー今に見ておれー

苦勞しよった時分に、今、魚八となっているでしょ、あそこにあった役所に日給1円で勤めていた時分に、駿河台の日本大学の2階の専門部で研究をやったんです。それに帰りに寄ったんですよ。どういうコースで行ったかという、毎日歩くんですよ。私は服なんかなかったんだから。お母さんがこしらえてくれた着物と、羽織と袴、下駄は西郷さんと同じように高下駄です。何で雨も降らないのに高下駄を履くかという、あの高下駄は減っても歯だけは入れ歯をしてもらえば、鼻緒は使える。だから、高下駄を履いて通うんですよ。

その時分に電車はどれだけあったかと言ったら、この前の道路を、品川から雷門行きという電車があったんです。それは、この通り、銀座を通過して、京橋を通過して、神田を通過して、須田町へ行って、須田町から上野へ行って、雷門でおしまい。須田町のところで、今度神田の方へ分かれて、小川町を通過して、駿河台を通過して、神保町を通過して、九段を通過して、九段から曲がって早稲田へ行く。電車はこれだけしかなかったんです。築地から今のその資生堂のところまで高下駄で歩いて出る。羽織、袴で、金ボタンの服なんか金がないから買えやしない。ずっと私は羽織、袴で通したんだから。高下駄履いて。かばんがないから風呂敷で包んで、資生堂のところへ出るんです。資生堂のところへ出て、早稲田行きの電車に乗れば、ずっと須田町から回って、日本大学の夜学まで行ける。ところが、電車賃が7銭ですよ。それが惜しいんです。なぜ惜しいかという、10銭で夕飯が食べたんだから。

何を食うかという、丼にご飯を入れておいて、ご飯も悪い米ですよ、ライスカレーみたいにひょっと掛けてくれるんです。普通のライスカレーと違うんですね。バカガイという貝があるんです、アサリじゃないんです。アサリによく似ているけれども、身が小さくて砂を含んでいるから、捕っ

ても皆捨ててしまって、本当は捕るのは、アサリとハマグリだけで、バカガイは皆放っておく。バカガイを捕ってくるのがばかだから、バカガイというあだ名がついていたんです。そのバカガイを飲食屋が捕って鍋の中で洗うんです。そうすると、熱いから口を開ける。ガラガラ洗うと砂が出て、細い身が出てくるんです。その細い身を、ライスカレーのような液体の中に入れて、あとニンジンとか、タマネギを煮たものをちょっとすくって、こちらのご飯の上にのせる。これが漬物をつけて10銭で食えるんです。その10銭の飯を食って、日本大学に行くんですよ。またそこで7銭を払ったら、7銭の上に3銭足したら、1食浮くでしょ。それが惜しいので、電車に乗らないで、電車を実切って、日比谷公園に出るんです。日比谷公園のところから、今は花屋がありますよね、東京帝国ホテルの前に。あの花屋のところから日比谷公園に入って斜めに宮城の方に歩いて、宮城の手前に土橋があって、あそこまで斜めに歩けたんです。あそこから土橋を渡って、桜田門を左に見て、二重橋を見て、とぼとぼ歩いて、九段下に出て、駿河台の方へ歩いていったわけです。

そのときに、宮城の前が、今の5分の1ぐらいだったです。今は広がってますから。しかも砂利ですよ。砂利だから下がコンクリートでつくってないですから、伊勢の大神宮と同じように砂利道です。その横に少し人道があって、そこを本を風呂敷に包んで歩いて行きよる。それで5時ごろになると、後ろから会社の社長級が会社の乗用車で通るんです。そのときに、ぴしゃと泥がかかるんですよ。だから、すぐにこうもり傘を広げて、それで行っちゃうんですよ。また来るから、またこういうふうにしなきゃいけない。そのとき見れば、大きな車に社長が1人乗っているだけ。あの社長さんが、運転手の横に乗せてくれたら、学校へも遅れないで行くのになと思ったね。けれども、あの社長も人じゃないか、俺も人じゃないかと。俺だって必ず自動車を持ってやるから。それで私は心に誓ったんです。私たちの学校の歌に、「舜、何人ぞ。彼も人」。おれも人だ、舜も人だ、舜に負けてたまるかと。「舜、何人ぞ。彼も人、英姿颯爽、意気高し」というのが昔の中学校の歌にあるんです。あれも人、おれも人じゃないか。おれも必ず自動車を持ってやるからと。それで、織田信長は「人生わずか50年」と言ったけれども、私は50歳で一生の財政を確立しようと思っていたら、50歳になったら自動車に乗ってやろうと思っていたの。それで、私は50歳で自動車を持ったんですよ。そうしたら、皆が悪口を言うんです。東京法曹の中でも、私より先輩が歩いて、日比谷公園で電車で公園を横切っているのを、私は自家用車で、運転手を雇って乗ったんです。渡部がヤマカンで自動車に乗りよると。私は知らん顔をしとったんです。ただ私が心配していたのは、今は自動車がなくてもいいんだけど、この自動車をいつまで持てるか、一生、おまえ持てるかと。70~80歳になって貧乏したときに、自動車がなくなったら、かえってない方がいいですよ。今まで自動車がかったのに年をとって自動車がなくなったら、つらい。それだったら、今までなかったけれども、80歳になって自動車が買えるようになった方が楽ではないかと、迷ったんです。迷ったけれども、そんな先はわからない。とにかく、自分は一遍自動車を持ってやろうと誓ったんだから、それで持ったんです。

その頃に、そこに勤めていた連中が、渡部君、丸ビルを見せてやるよと言うんです。丸ビルというのは、一番大きい、屋上に上がったんです。屋根の上なんか吹き飛ばされちゃう、と言ったら、ビルの上は大丈夫だよと言って、連れて上がったんですよ。東京駅は今よりももうちょっと高かつ

た。あれは震災でちょっと低くなったけれど。見渡すかぎりビルがあるんですよ。その時分はビルと言わなかったです。愛媛県では、県庁と裁判所だけが西洋建てで、あとはみんな日本建て。東京にはこれだけビルができたのかと思った。そのときに思ったのは、これはだれかのものだ。たくさんあるけれど、所有者のないものはない。だれかの所有なんだが、ああ、金持ちが多いんだなと思ったですよ。それで、私も東京に、この広いところにビルを1つ、西洋建てを1つぐらい建てたいもんだ。これが私の念願。これと自動車の2つだけ。だから、自動車は50歳からずっと自家用ですよ。運転手は、田舎の私の出た中学校、高等学校を出ただけで来て、私のところで41年、自動車をやってくれている。そんな運転手はおりませんよ。

さっき言ったように、私が終戦後東京へ来て、そのブラックマーケットを借りて、あらゆる準備をしたときに焼けてしまった。それで、田舎へ帰るつもりで、私が下宿へ帰ったですよ。そうしたら、渡部先生は、せっかくビルを建てるのに焼けてしまって、がっかりして気違いになりはしないかしらと言って、私の慰めのために、火事の晩に寄ってくれた人が8人ぐらいおるんですよ。その中の友人に1人弁護士がいて、あとは皆普通の友人だったんですよ。その友人に助けられて、私はこんな幸福にめぐりあったたのです。どういうことかという、その友人は大分の弁護士で、私が明治大学の高等研究科の出身だから、明治大学の高等研究科の嘱託で夜、受験生の指導に行きよったんです。そのときに来っていた男で、大分県の出身で、大分の農業学校を出たんで、一番頭が悪いので、10人が研究会をこしらえていたんだけど、一番後に残って、司法試験を通ったような頭の悪い男がおるんです。その男が来てくれとったです。それと、銀座の洋服屋があって、その洋服屋が、私が本郷にいた頃隣に住んでいて、私が兵隊に行ったとき、彼は残っていて、その男は銀座に店を持っていて、それが見舞いに来てくれた。それで、私は、そのとき宿のおかみさんに、「2度あることは3度あると言うて恐ろしいから、今晚、私は皆さんとお別れして、しばらく田舎へ帰るつもりです。だから、おかみさん、すまないけれど、酒屋に行って、お別れの酒を買ってきてくれませんか」「先生、酒なんかありませんよ」「濁り酒でいいから買ってきてください」それで濁り酒を買ってきて、ここに集まった5~6人の人に、私はお別れのつもりで、せっかく見舞ってくれたんだから、皆さんとはしばらくお別れして、田舎へ一遍帰ってこようと思うと。女房が一緒にお正月を、というのを、ほったらかして来たから罰が当たったのかもしれないと思ったりもしたです。それで、飲みよるときに、その洋服屋の斎藤という男が、私より8歳年下だけれども、賢い男ですよ。「先生はまさか、火事にあつたからといって、奥さんのところへ帰るようなことはしないでしょね」私の心を見破ったんですね。私は帰るつもりでいるのだから、私は、帰らないよ、とは言わない。ああ、と言っただけ。そうしたら、その弁護士の堀口が、先生、洪水のときに、小石は、みんな上からどんどん洪水で川の水が流れてくると、コロコロ転がされて、海に落ちてしまう。大石は洪水の力が100でも、200貫の重さだったら動かない。動かないから、ここの砂がとれちゃって穴があくから、コツンと上に行く、また上に行く、と言うんです。「先生、2人は海に落ちてしまった小石だよ。私は兄貴とは思わんよ。上を向いて流れてくれ」、と言ったんです。この2人の言葉で帰れなくなったんです。それで私はそこで「汝志を立てて、郷関を出づ。事もしなれば、死しても帰らず」という詩吟をやったんです。その意気、その意気と言って、それで帰れなくなって、あとを探すことになって、ここの焼け野原の30坪を3万円で買って、それで掘っ立て

小屋を建てたのがもとで、この駅前の大きなビルも何にもなかったんだから。今は隣のヤクルトが14階建て、こちらの徳間書店も14階建てで、これに挟まれた10階建てのビルだけれど、皆ヤクルト本社の隣です、と電話かけるから、ばか、渡部の隣にヤクルトがあると云えと、冗談に言いよるんです。私のところは、一番小さくても何も心配なしでやっている。

みんな神のおかげで、だから、大東亜戦争に行ったために、私はここができて、さもなかったら、私はまだ三菱の丸の内に借りとるですよ。私は逆に、あの丸の内の事務所を失ったために、これができたんで。みんなそういうふう不幸なことがテンコシャンコいっとるですよ。だから、私は何といつても、運の強い男と、自分で自信を持つとるんですよ。だから、私の先祖代々の履歴を戸籍謄本をとってみましても、みんな百姓で生まれて百姓で死んで、長生きしても80代ですよ。私は、親兄弟全部の幸せを一手にして、みんなの残した寿命を一手にしているんですよ。これで3月の20日が来れば、3月の21日で、数えが98歳になるんだものね。もう100歳に手が届くでしょ。だから、私は本当に幸せだと思ってるの。

人生の二大事業

今までも言ったけれど、大体人生には2つの事業があって、1つは財政確立の事業。1つは長寿の事業。この2つの事業を持っているの、誰でも。財政確立の事業のために毎日弁護士をやるのだから、人権擁護だと言ったところで、人が金をくれなかったら、やるわけない。この2つを人生の事業と言うんです。事業とは何ぞと言ったら、ある1つの目的の達成のために、毎日同じことを繰り返すことを事業と言う。財政を確立しなければ、自分の子供も教育をさせることもできなし、自分たちも年をとって生活できない。これを財政確立の事業という。もう1つは長寿の事業。長生きしたい、生命を保持したいという目的のために、三度三度飯を食って、1日に8時間寝るわけです。これも事業ですよ。この2つの事業を持っていることを忘れてはいけない。

財政確立の成功者は、どこまでいって成功と言うかという、何10億円も持つ必要はないの。死んだときに金を持っていけるわけないんだから、自分が生活できて、子供に当たり前の勉強をさせて、結婚をさせるとか、嫁をとってやるまで親の責任で、それから先は何ぼお金を集めても、ばかな子に全員なりますよ。それであと、自分と女房と2人が、80歳なら80歳まで生きるときに、もう稼がなくなったら小遣いが要る。小遣いがなくて、お父さん、若いときにもう少し金儲けをしていたら、こんな苦勞をすることはなかったのに、というようなことがないように、例えば、1億円なら1億円だけ、爺さんと婆さんとが持つとったら、家屋敷や自分の物なんか要らないです。

でも、一方の長寿の事業には証書がない。これを忘れがちなのが人生の弱点なんです。長寿の方は、今80歳が平均寿命だから、80歳の坂を越えたら長寿の成功者。この2つの成功をおさめた人が、これすなわち、人生の勝利者だと言うんです。

あとよく書く言葉があるの。「政治的野心」という言葉と「世話好き」言う言葉。これは東京法曹の若手に言うことでね、東京法曹の若手の中に2とおりあると言うんです。自分が最後に、副会長なり、東京弁護士会の会長なり、何か政治的野心のある人と、それから、自分は弁護士なんだから、会長とか何かは問題にしないと、弁護士として一生懸命して成功すれば、それでいいんだという人と、2とおりあります。政治的野心のある人は、普段からの心がけが大切だと言うんです。それと「世話好き」。もう何でもかんでも世話しくちゃいけないの。私は野心でやったんじゃないけど、私は好きなんで、弁護士会の運動会は私が始めたんだからね。私が音頭をとって、何もかも委員長を務めて、昔の豊島園の運動場を借りて、そこの顧問弁護士の先生に頼んで、私が1人でプログラムをこしらえて、運動の区分けをして、日本橋に行って商品を買って、1等、2等、3等にして、全部1人でやりよったんですよ。ところが、今はどうかというと、委員長、副委員長とかこしらえて、がたがたやりよるんです。私は自動車に弁護士のマークをつけているんですが、あれは、私が、ドライバーズ・クラブというのをこしらえて、それで、あのマークもこしらえたんですよ。あれは私の娘が考案しました。それから、共同保険も、団体保険もこしらえたんです。団体保険をこしらえて、寿会をこしらえて、初めて東京弁護士会に団体の保険をこしらえた。それから後に樋口君が会長のときに、今の弁護士会の団体保険ができたんやから。そういうふうな形で、世話好きだったんですよ。何でもかんでも。だから、秀才でも何でもなし。秀才は私は嫌いなんだから。

外に「上下に関心」とも書く。私が東京へ来ると、お母さんは、利口な人になれ、あるいは勉強して1番になれ、ということは決して言わないんですよ。偉くなろうと思ったら、上の人に可愛がられなくちゃいけないと言うのですよ。小さい時分から私は、あの人は偉い人だ、おじさん、おじさんと頭を下げて、お母さんが、絶対に頭を下げて上の人に可愛がられなくちゃいけないと言ったですよ。表を通る人に、おじさん、こんにちは、おじさん、何食べよるのと言うと、おじさんが、うまいよ、やろうか。ええ、なんて私は貰うんですよ。この子は人さらいにとられやしないかと、お母さんが心配したぐらいに、人懐こくて、村の人にも可愛がられた。人に可愛がられる人間でなくてははいけない。下からも押し上げられなくちゃいけないから、人気を取らなきゃいけない。

「財政」も大切なんだ。財政の確立は、会長になろう、何になろうとすれば、相当財産が要りますよ。皆が金を出し寄って費用にするけれども、これは矛盾していること。黙って私はやるけれど、自分の名誉で皆、神輿を担がせるだけだから。担ぐ人は副会長にも会長にもなれない。上に乗っている人が会長の肩書を取って、一生それを使える。それで担ぐ人にまで、選挙費用を1万円だとか2万円出してくれと言っても無理ですよ。弁当代とか何か、自分が出さなくちゃ駄目ですよ。だから、まず財政を確立しなくちゃ。それには、今言ったように、自分で50歳までは何にしても一生懸命働かなくちゃいけない。

あと願っているのは「東京法曹会の発展」。今私が考えてみると、東京法曹に一番若手の偉い人が揃っとるですよ。その若手の偉い人が群雄割拠したら東京法曹は駄目です。私が見て群雄割拠の恐れがある。これからは仲よくやらなければ駄目。群雄割拠は戦国時代のことで、皆滅ぼしあって、お互いに破滅しちゃうんですね。だから、それをやめて、皆が仲よくしなくちゃいけない。「和を

もって貴しとなす」で、和合しなくちゃいけない。それと、この若い人の中に他を思う人が何人おるですか、己のことだけ思っとったら駄目ですよ。会は分離するかもしれませんよ。親和会から出た同志会の姿は哀れでしょうが。

「苦勞は宝」 苦勞をしない人は、いくら親から金をもらっても、あるいは親のお金で地位を獲得しても、それは「空」のもので、すぐになくなってしまいます。苦勞してたたき上げた人が地位をつかみ、あるいは財産をつかんだら、初めて、それが地位になり、財産になるの。だから、それを頭に置かなきゃいけない。子供を教育しなくては。ぼんぼんで、子供のために財産を残したと思っただって、子供に教育がなかったらパイのパイのパイになる。だから、苦勞をしないでやったものは、競馬、競輪、パチンコで儲けたとか、株で当てて儲けたとか、そういうのは「空」のもですよ。

「健康と信念」 人間はまず健康でなくてははいけませんね。親から貰った素質は無論ありますけれども、自分が自分の体を健康にもっていくと。医者があるじゃないかと、みんな言うけれども、医者というものは他人です。今便通がいいか悪いか、あるいは小便が出ないか、あるいは胃が悪いか、ということは、自分が一番よく知っておるんです。医者へ行って、先生、私はどこが悪いでしょうか、と聞いて、それで医者が、あなたはどこが悪いと当てられるわけがないですよ。どこが悪いですか。先生、ここがチクチクするんですが。じゃあ、見てみましょう、レントゲンをかけてみましょう、ああ、これは潰瘍かもしれませんよ、と言うのであって、何もなくて、先生今私はどこが悪いでしょうかと言っても、わかりっこない。自分は朝から晩まで神経が働いていて、自分が一番わかっているんだから、自分がここが悪いと言えばここ、足なら足の療養を自分でやらなくちゃいけない。医者にはばかり頼っておっても駄目。医者もピンからキリまでいるから。

肩書きに騙されないこと

ある依頼者が来て、「先生、僕の友人が私に恥をかかせたんですよ。」私「どんな恥をかかせたんですか。」、「君のところの先生は、渡部先生と言って、東京弁護士会の会長をした先生だと言って君は威張るけれども、おまえのところの渡部先生は法学士だろうが、私のところの顧問弁護士は法学博士だよ。」と言われたんだというんですよ。法学博士はだれだったか、名前を聞いてこいと言ったら、そうしたら、つまらないやつなんです。それが、確か「天皇の法律上の地位」という論文か何かで博士になったんだよね。「天皇の法律上の地位」で弁護士になった弁護士が法学博士と言ったところで、会社の整理も何もできたもんじゃないし、離婚問題をできるわけでもなんでもない。それでも、「博士」という言葉に、一般の人は惑わされてしまうんです。

医者でもそうですよ、坊ちゃんて私立医科大学に金で入った人もおるだろうし、金で入って卒業したら、またその学校に居候でおって、それから、助手からお医者さんになって、主任になっている人もおるかもしれないですね。その人が実際、偉い先生だと言っても、その人も、女房、子供が

あるでしょう。そんな先生が医者だからと言って、その先生の嫁さん、子供が長生きするかと言ったら、そうでもないですよ。先生というのは、そこで月給をもらっているから先生で、患者さんのために一生懸命になるのでも何でもないんだから、まず健康は自分が自分の体をよく知って、自分で管理しなくてははいけないと言うんです。

目的のために投資を惜しむな

自分はこうしてこうするんだという信念のある人間でないといけないと言うんですよ。

例えば、私が大阪に行くときは、夜行電車で行って、明くる日の朝、大阪駅に着いて、それでご飯を食べて裁判所に行く。これが通例だったんです。東京へ帰るときに、昔、2等と3等というのがあって、弁護士で行くときは2等の費用をくれるんですよ。でも、2等で行かないで3等で行くと、往復半額で行けるから、そうすると、半額分が自分の収入になる。若い人は皆そうするんです。年をとった人は、やはり2等で行ったり、寝台で行ったりする人もあったかもしれないけれども。そのとき私は若い頃から、常に2等で行くんですよ。それが評判になって、東京法曹の中にもアンチ渡部がいるんですよ。私より早く試験を通った人が、私の悪口を言うんです。その人が渡部は生意気だと言うんです。何も2等で行かなくても3等で行けるのに、はったりで、2等で大阪に行きよる、と言うんです。何を言われても、私が知らん顔をして2等で行っていたら、それが評判になったんですよ。それで、アンチ渡部のやつが、皆がいるところで、「渡部、大阪へ行くのに2等の切符で行くんだってね」「はい」「2等で行っても3等で行っても大阪駅に着くのは同じだろう」「そうですね」それ以上は向こうも聞かなし、ばかばかしいじゃないか、はったりは、と言わんばかりに、皆のおる前で言うんですよ。私は、そうですね、同じですね、と黙っているんですよ。私には私の考えがあるんです。

どんな考えがあるかという、3等には3等のお客さんが乗とるんですよ。2等には2等級の金持ちが乗っているんです。大阪に行くまでとにかく一昼夜かかるのだから、その間知り合いになるのに、貧乏人じゃなくて、金持ちと知り合いになりたいと思うんですよ。ただ、寝て起きるんじゃないんですよ。2等には2等の人に乗っているから、誰かいい人と知り合いになってやろうと思うから。3等だと、隣のおかみさんが子供を抱いていて、子供が泣いても向こうへ行ってくれとは言えない。寝られないじゃないですか、明くる日裁判があるのに。だから、私は2等に乗るんですよ。その当時は、指定券というのはなかったんです。だから、どこへ乗ってもいいんですよ。そうすると、どこか綺麗なお嬢さんがおったら、とたいの人は綺麗なお嬢さんが乗っているところに座るんですよ。私はそうじゃないですよ。

どなたかいい人と知り合いたいと思うから、60歳を過ぎた、恐らく社長級の人が2等の、大阪に向かって右側の列に乗って、大阪の方にお尻を向けとるんです。その前が空いていた。その人はどこかの偉い社長さんだと思うから、その前に行って座って「失礼します」。どこでも座っていいんだからそこへ座るな、とは言わないでしょ。それでじっと座っているんです。向こうも座っている。

向こうは、恐らく私のことを、年は若い、まだ30代だと思うが、どこか金持ちの坊ちゃんか誰かかもしれないけれど、坊ちゃんという顔じゃない、苦労人みたいな顔だ、何で行きよるのかなと思って、私の方をじろじろ見る。私も、先生と言っていいのか、社長さんと言っていいのか知らないけれど、相当偉い人やな、と思っているけれど、黙っているんです。そのうちに、車掌が「ご報告いたします、右手に富士山が見えます、富士山が雪の帽子をかぶっております、立派です、ごらんください」と言うから皆が見る。なるほど富士山の6合目ぐらいまでずっと雪が来ているのです。こちら側の人ものぞきにきて「ああ、立派だな」。そうしたら、前の偉い人が初めて「ああ、随分きれいな」と言うんですよ。そこで私も「そうでございますね、随分きれいですね」と言ったら、「おれはたびたび通っているけれども、これだけ富士山が立派に雪をかぶっているのは初めてだな」「ああ、左様でございますか」そのとき、この人と口をきいただけなんですよ。

それで、富士山を過ぎてしまった。だけど、私は何とかきっかけ作ってやろうと思っているから、夕方になったらボーイが出て「お食事の用意ができましたから、ご用の方は食堂においでください、これから3両前でございます」と言いに来たんです。前の人が黙って食堂へ立って行ったんです。私も1拍遅れて、あまり遅れないでついていくんですよ。そうすると、食堂車は1つだから、テーブルに座ると、食堂車は4人も座れないから、こちらに2人、向こうへ2人、通路が埋まっているから、また前に、「失礼します」と座るんです。そこにお茶が出ているけれど、ボーイが来る前にお茶をくんで、「社長さん、どうぞ」とやるんですよ。「すまん」と思うでしょ。それからボーイが来て「何さしあげますか、ビールとオムレツとカップライス」と言う。私は真似をしないで、何か早くできるもの「ライスカレーを1つ下さい」と言って、ライスカレーをもらうんですよ。食べたなら、「お先に失礼します」と言って帰っちゃう。社長はゆっくり飲んで食うて帰るのだから。その次の駅で汽車は停まります。特急というはなかったんやから。すぐおりて夕刊を買うんですよ。それで戻って待っているんです。社長が楊枝をくわえて帰っていると、「社長さん、夕刊いかがですか」「あれ、夕刊どうした」「買ってきましたよ」。中に新聞売りはいないんだから。今ごろニュースはないんだから。「いいかね」「いいです」それで読む。今度は読売をもって、「これ、読売いかがですか」と言って見せるんです。だから、口きかざるを得ないですよ。それで向こうが、「どちらへ行くかね」と言うんだよね。「商用かね。「はい、商用と言えば商用でございますけれど、実は……」これできっかけが掴めたんです。「おお、先生か」と言うんです。で、「いろいろ世話になるな」と言って、私に名刺をくれるんですよ。そうしたら、新潟鉄工の東京支店長と書いてある。「はあ、鉄工所の社長さんですか、どうも恐れ入りました。社長さん、ちょっとお願いがあるんですが」「何かな」「弁護士というのは、ありとあらゆる方とご交際を願って、また事件のご依頼を受けるんでございますが、今までの勉強は、一にも二にも法律で、法律に始まって法律で終わっているんで……」

私は、いつでも帳面を持っていたんですよ。すぐに鉛筆を出して、必要なことを書き取るんです。「鉄骨鉄筋のビルを建てるときに、一坪に鉄が何トンぐらい要るのでしょうか」「熱心な奴だな」と思うでしょ。それをみんな書き取って「どうも有り難うございました、これで鉄のお話に対する常識ができました、鉄のことなんか何にもお伺いしたことがないもんですから、有り難うございま

した」と言って、そうして眠くなったら、向こうも寝る、こっちも寝る。「社長さんはどちらへ？」
「私は岡山へ行くので、しょっちゅう通るけれど、富士山のきれいな姿を初めて見た」「ああ、岡山
山でございますか」それで朝、大阪、大阪、3分間停車、と言うので、「私は、大阪でございます、
失礼致しました、御免ください、お別れいたします」と言って出るんですよ。出て別れたら、それ
でおしまいです、私はじっと窓の外で社長の方を向いとるんです。で、社長がひょいと見ると、
プラットホームに私が立っている。社長も、弁護士さんは何で立っているのか、何か忘れたのかと
思っている。そうすると、汽車が動き出すと、私は最敬礼して、それまで動かないんですよ。それ
だけ印象づけておくんですよ。

それから後はまた、工作なんだ。社長も、いろいろな人と会うから、それくらいのことではいつ
までも頭に残ってないよ。頭に残っている間にもう一遍会いたいと思って、それから1週間経たな
いうちに、その名刺を見て、戦前だから、今はもう区画整理で変わってしまったけれど、日本橋の
ところを捜していくと、日本橋の、今の昭和通りの、角のビルディングに新潟鉄工・東京支店とい
う看板が出ているんですよ。そこへ行きまして、私が名刺を出して、先日は車中でご教授いただき
有り難うございました、5分間でよろしいですから、ご面会願いますでしょうか、と書いて、ベル
を押して、社長はいらっしゃいますか。ええ、いらっしゃいます。社長さんにこの名刺を渡して、
5分間でいいですから、会ってもらえるように、と言ったんですよ。なかなか出てこないの、あ
あ、駄目だったかな、と思う頃出てきて、どうぞお通りください。「よー」って迎えるから、入り
口から最敬礼で。「まあ、どうぞおかけください」「社長さん、この間は汽車の中で偶然お知り合
い願って、いろいろ鉄のことについてご講義をいただいて、私は本当に喜びました、帰って、友だ
ちにまで自慢話をしましたが、鉄の話題は大分できました」「君はこの辺を通るのかね」「社長さ
ん、この通りの向こうに私の依頼者の家がございます、時々依頼者と相談するために年中ここを
通っていました。今まで気がつかなかったけれども、ひょいと気がついたら、社長さんの名刺の看
板が出ていたものだから、懐かしさのあまり、予告もなしに上がりまして、誠に失礼致しました」
「あっ、そうかね、時々？」「ええ、1カ月に2度くらいは、いろいろ事件の打ち合わせで通るん
です」と言ったら「うん、そうかね、また来たら寄りたまえ」「はい、あ、もう5分たちます」「ま
あ、いいじゃないか」、とコーヒーを持ってこさせて「どうぞ」と言うから、残ってコーヒーをい
ただいて話をするんですね。それが元で私はその社長さんに随分、事件を紹介してもらったん
ですよ。

もうひとつは、私は温泉に行くなら必ず、一流温泉に行くんですよ。これもやはり客取りですよ。
それで湯河原で1人いい客をつかんだことがあるんです。昔は、どんなにいいホテルへ行っても、
部屋の中に湯はないんです。外湯だけです。そこへ団体が来ます。団体も、いい宿屋にはいい団
体に来るんですね。それで夜は、団体客は来たらもうすぐに風呂に入りますからね、夕食までに。
夕食したら、もう酒を飲んでいるから1時間、2時間で来やしないから、そこへ行ったら駄目な
んですよ。彼らは酒を飲んで騒いで、明くる日11時に大抵出てしまうんです。夕べ騒いだから朝湯
なんかに行かないんですよ。ところが、私は朝6時ごろに朝湯に行くんです。

そうすると、頭のちょっとはげかかった人で、男前で役者にしたらいい役者になるな、という人がいるんです。こっちは弁護士で若いやつが入っているから、向こうも向こうで知らん顔して、3日目に、正月の松の内に行っと思ったんだが、「いいお風呂ですね」と向こうが言うんです。それで私も「そうですね、夜は騒がしいけれど、朝は静かでいいお湯ですね」「あなた、お一人ですか」と言うから、「いいえ、家族で来ているんですよ」「そうですか、ご商売ですか」「いや、私は実は弁護士でして」「あっ、先生ですか」と言うんですよね。「そうなんですよ」。向こうは何も言わなかったんです。その明るく日に行ったら、やはりきているんです。それで今度は、明るく日、向こうから切り出した。「先生に、お風呂の中でこんなことを聞いたらおかしいけれど、日本の裁判も法律も目茶ですね」「何ですか」と言ったら、「私はある人に金を貸しておったが、その金を払わないでいるので、弁護士さんを頼んで裁判をするということになって、弁護士さんにお金を払って、それで裁判をした」と言うんですね。

一遍して勝ったら、また向こうが控訴して、また裁判して2度金を払った、と言うんです。また、向こうが控訴するかしれないと思うから、2番目はやめたって言うんですよ。そうしたところが、判決確定した。そうしたら、弁護士が執行するから、執行の費用を出せと言って、それで費用を弁護士に預けた。弁護士は執行に行ったんです。向こうは鉄工所だと言うんです。鉄工所と自宅と両方あるんです。両方を差し押さえに行っったと言うんです。行ったら、片一方は会社の財産だからと言って、差し押さえしてくれなかった。もう片一方の自宅の方は、やはり差し押さえるものがなかったとか何とかというので、「結局何にも取れないで、裁判の費用と差し押さえの費用と、費用ばかり使っただけで、判決なんかチリ紙ほどの役にも立たないじゃないですか。そんなもので裁判所はいいのですかね」と言うから「それは、あなたはお困りだろうけれど、全然取れないということはないです、やり方一つでしょう」「やり方一つというはどんなことですか」。ここにトーチカがあるとしますよ。支那事変が始まっていたから。鉄砲で撃ってもだれも死なない、機関銃で撃っても何でもない、速射砲で撃っても駄目、大砲で撃っても駄目なら、飛行機から爆弾を落としたり、トーチカでも潰れてしまう。「やり方一つですよ、やり方によったら取れないこともないですよ」と言ったら、「それなら、やり方によったら、あなた取れますか」「ええ、取れるでしょうね」「やってくれますか」「やってもいいですよ」「そのかわり、実は私のところは、あなたに話したように、何だかんだとお金ばかり弁護士に払っているから、これ以上お金を払うのもなんだから、あなたの方でやってくれて、取り立ての半分をあなたにあげますから、やってくれませんか」。こっちは若いから、「それも1つの方法でございませうけれど、取り立ての半分でやるということは、弁護士会の規則で駄目です、けれども、着手金は、弁護士に払ったんだから、渡部には払わなくても、私らの仲間が着手金をもらっているから、それでいいことにしましょう。私は私で1つ手があるから、勝負をやるのに、自分の金を出してやることはできませんから、裁判の実際の費用だけは出してくれませんか、あとは取り立ての半分でいいですよ」。そうしたら、「費用だけ出します」と言って、「やってくれますか」「ええ、やります」。それで委任をもらって、私は執行をしたんです。

まず執達吏が何遍も自宅の方に行っったんですよ。「こっちは弁護士です、判決があつて、これを差し押さえしますから」と言ったら、奥さんみたいなのが出てきて「ここには主人はいませんよ」

「いないんですか」「ええ、これは私の物で、主人はここに一切住んでおりません」と言うんです。主人がいないとすれば、仕方がない、工場の方へ行ってくれ、と言うんで、「いないんですか」と言いながら、手紙の状差しを見たんです。主人宛のはがきがある。それで私が、「奥さん、これご主人宛のはがきがあるが、ご主人がいないのに、郵便屋さんがやって来て状差しにはがきを差して帰ったんですか、そんなことない、あなたが差したんでしょうが。ご主人のはがきがある限り、ここはご主人の家ですよ」と言って執達吏と2人で筆筒をかき出しはじめたら、女房がまた、「こんな書類もあるんですが」と言って出してくるんですよ。これは三者執行しているんですよ。差し押さえして、競売になって、あなたの物になっているのを、あなたから借りたような形で、三者執行になっているから駄目ですよ。それなら、執行に来たけれども、差し押さえ物件なしという調書をこしらえてください、と言って、こしらえてもらって帰ったんです。今度は工場に行ってくださいと言うと、執達吏は執行は日没までだからだめだというのですよ。私は、裁判所に行って、あした、昼間してくれと言ったんですよ。やはりものには順序がある、ほかにも予定が詰まっているのだから、1週間か10日先に、もう一遍来てくださいよ、そして行くときを決めましょうということになったんです。

1週間、10日経ったんです。それで今度は、会社へ行っただけです。そうしたら、平屋だけど、こちらに住宅と工場があって、タレットとか旋盤とか、職工が20人ぐらいダーツと機械が動いている、事務所から見えるんですね。私は「債権者の代理人として差し押さえに来ました」と言ったら「これは会社になっておるですわ」と言うんだね。工場の方は会社かもしれないけれど、筆筒だとか、冷蔵庫とか、あるいは押し入れのこちらにきれいなテーブルなんかもある、ああいうふうなのは会社の物じゃないだろう、住宅だから、これを差し押さえよう、と言ったんです。そうしたら、またその主人が、こういうふうになっているんですが、と言って、三者執行のそれをまた持ってくるんですよね。その日付が、この前私が自宅に行ってから後にこしらえた公正証書でやっているんですね。それで私が、あんまり癪にさわったから、これみんな点検をやりましょう、と言って、これを見ながら点検していたら、そちらに洋服筆筒のいいのがあるんです。それが会社の名前の方にも入っているし、書いた方にも入っているんです。これは、あなた、2つも洋服筆筒が会社の物になっていたり、個人で三者執行になっていたりする、これはおかしいじゃないですか、この三者執行はでたらめですよ、と言ったんです。そうしたら「でたらめとは何だ」と主人が、今まで黙って聞いていたのがそばに寄ってきて「ふざけたことを言うと、承知しないぞ」と言って、ひょいと見たら、ハンマーを振り上げているんですよ。人間様じゃないか、過ちもあらあね、1つ間違っただけでたらめとは何だ、もう1回言ってみろ、と言うんです。私が立ったら、ガンと頭蓋骨粉碎になってしまいますよ。それで私は黙って俯いておったんです。執達吏が、どうしますか、と言うから、やはり、そういう三者執行になっているのなら、仕方がないから、望んだけれども、差し押さえ物件なしで調書を作ってくださいと。それで作ってもらったんです。馬鹿にしがたって、そのまま私は表に出たんです。そうしたら、その時はハンマーを持ってない。私は力が強いんだから、ハンマーがなかったら、柔道でも何でもやってやろうと思ったから、おい、おれはこれから帰るよ、けれど、今おまえがハンマーを振り上げた、あの勢いを忘れるな、今度おまえとお目にかかるときは違うところでお目にかかるからな、よく覚えておけ、と言って帰ったんです。

帰って何をしたかという、破産申請をしたんです。当然、破産になる。それで、ある弁護士を頼んで、これを提出したんですよ。提出する方法として、調停申し立てをして提出したんです。それで調停の場になったら、向こうの弁護士が、尊敬する人だったんだけど、私が黙っていたら、とにかく、半分ぐらいにまけてもらって、借金してでも払うから、それで示談にしてくれ、と言うんです。ところが、半分にまけたら、私の貰い分がなくなる。調停員が「どうしますか」と言うから、「まけることできません。これは私の命がかかっている事件でございますから、この人はハンマーを振り上げた、私が立ったら頭蓋骨粉碎で即死だ、金を借りるときに、拝むの頼むのと言って借りたんだ、恩人にだって金を返さない人が、恩人の代理人で来た私にハンマーを振り上げて、あれは、私が立ったらそのまま粉碎、即死だ」、と言ったんですよ。それで、相手方に、「あれだけの勇氣がある人間が、泣き言を言うとは何事か、耳をそろえて払いなさい、まけることはできません」、と言ったんです。調停員も、そうか、だったら、きょうは仕方がないから、1回延期しましょう、と言って、延期したんです。2度目に行ったら、2度目の弁護士が、月賦で、なんて言ったけれど、結論として、今、半分くれ、あとを月賦にしましょうと。いや、半分にしてくれるんだったら、借金してと思ったけれど、手元に半分あるわけではない、と言うんです。そんなことは通らない。半分で借金できるなら、借金して半分払ってくれと言ったんです。あとは月賦だと言うんですよ。その後もう今月で月賦は全部終わりという時に、相手が来たのですよ、「通せ、私が説教してやるから」「こんにちは」「どうぞお通りください。あなたと長い間闘って、第1回の弁護士はまけていたけれども、東京弁護士会の中には、おれみたいな骨っ節の強い弁護士もいるということを忘れちゃいけないよ、差し押さえができなかったって、おまえ得意になったかもしれんけれど、こんな骨っ節の強い弁護士もいるということを忘れるな」、と言ったら、「心にしみました、ありがとうございました。」それから、その依頼者が、渡部さんは天下一の弁護士だということで、何ぼ事件を世話してくれたか。そういうふうな形ですよ。私は1つの信念に基づいて、だれが何と言っても、変わらないんだから。それは私が苦勞をしているから、その信念ができていますよ。信念の男にならなくちゃならない。

きょうの話はそんなところかな。